

桔梗ヶ原分館報

第 3 0 号

開拓百年を迎えて

吉田 芳夫

今年は桔梗が原に開拓の鉞が打ち下ろされて丁度百年目に当る。公民館では十一月末頃には開拓百年の記念事業を行う計画をしていよう。桔梗が原分館がこの記念事業を計画したことは、我々桔梗が原に住む者として最も意義ある結構な事業であると思われ。太古から全く不耗の地として誰からも省れなかったこの原が、僅かの間に我が国有数のぶどうの産地としてその名が知られるようになったという事は、まことに特筆すべきことである。しかしながらよく考えれば、これに至るまでには想像以上の苦難とたゞかい、よくそれに堪えて今日の基盤を築き上げてくれた人々があったればこそ現在の桔梗が原が出現したのである。

先年名古屋大学が三年間にわたって大々的に桔梗が原の総合調査

を行ったことがある。いろいろの関係で私もこの調査に参加したが、何故これほどまでに大々的な調査をしなければならぬほど桔梗が原には何か変わった処があるのかと私は不思議に思った。たゞ考えられることは手もつけられなかった原野が一変して一大果樹郷と化してしまつたということくらいのもので、こうした例は方々に見られることであるから別段特筆すべき問題でもないように思われた。それで私は主任のM教授に何故に桔梗が原の総合調査をするようになったのか理由を尋ねた。そうしたらM教授は次のように答えてくれた。

桔梗が原の自然条件によいものはい一つもない。あらゆる点に於いて悪条件が揃っている。第一土地は瘠せて強酸性であり、氣候は寒冷であつて、水流は全く地下水は異状に低い。このような悪条件のもとに果樹栽培を専業として今日これまでの成功をみたのは我が国でも殆んど他にみられないめずらしいケースである。このような条件のもとで出発した大半は中途に於いて挫折し、またたとえつゞいていたとしても、細々と僅かに余命を保っているにすぎない。私達は開拓に当つた人々が、こうした悪条件のもとに、あらゆる困難を克服して、如何にして今日の桔梗が原をつくりあげたかを知りたい。

それをきいて私は今更ながら桔梗が原を見直さなければならぬやうな気がした。元来桔梗が原は水というものに全く縁がなかった。水の流れもななく地下水は低く、飲用水を得るためには二十五米以上も掘下げなければならぬ。こうしたことが永い間人類の棲息を拒んできた。もしこの原に一筋の流れでもあつたら或は早くから人が住みついて現在とは変わった様相を呈していたかも知れない。明治二年田中勘次郎氏が平出から出てきて初めてこの原の一角に開墾の鉞を打ちこんだ。先年私は平出博物館にある古文書を整理中田中勘次郎氏が村役人宛に桔梗が原開墾願を差出しているのを見つけた。これによると先頃から原の中を廻つて水の出せうなところを探し歩いたが、出るような場所を見つけたから移住して開墾させてほしい。というようなことが書かれていた。こうしてみると矢張田中氏も一番に考えたことは水のことである。しかしいざ掘り始めてみると、そう安々と水は出て来ない。何しろ当時として二十五米も掘下げるのは容易な業ではなかつたに相違ない。

田中氏の入植につゞいて附近の村々から少ないながらも入植する者が出来て来たが、明治十五年になつて桔梗が原は塩尻、宗賀、広丘の三ヶ村に分割拵下となつた。桔梗が原が本格的に開墾の始つたのは明治三十年頃からであろう。この頃から諏訪方面からの入植者が数を増してきた。これらの人の目的は、この原を開墾して桑を植え養蚕をするということであつた。荒れ果てた芝地を人力を以つて一鉄づつ掘起し、畑とするその努力は今我々が想像も及ばないほ

ど苦しいものであったと思われる。現在こうした経験を持つ人は殆んど世を去って当時を語り得る人は三、四名にすぎない。

これより先明治二十三年豊島理喜司なる人が塩尻地籍に醸造を目的にぶどうの苗木三千本ばかりを植えた。これが後年桔梗ヶ原がぶどうの栽培地となる端緒となるわけである。

明治の末期頃から養蚕を目的として入植した人々も次第にぶどうの栽培へと変換し始めた。と同時に入植者も漸次その数を増して来たのである。田中氏が開墾を始めて約半世紀後に至ってぶどう郷の幕明けとなる。

明治十五年三ヶ村に分割されたうち広丘地籍は原野と林とのまゝ、残され戦後に至って開墾されたが、宗賀地籍は早くから開墾されて果樹の栽植も最も早くからなされていた。

現在桔梗ヶ原は果樹地帯から住宅地へと大きく変りつゝある。古くから住みついた人も今は二世三世の時代となり、七十才以下の人々は殆んど開墾当時の苦しみを知らない。今日桔梗ヶ原は我が国に於ける有数のぶどうの産地として知ら

れるようになったその基礎をつくりあげてくれた先人に対して我々は多大の敬意と感謝を払わなければならぬだろう。

開拓百年をむかえ今後桔梗ヶ原がどのような行こうと、当時をしのんで記念すべき行事としたい。

桔梗ヶ原

北原 名田造

思い出のふるさと

未だ開墾されない草原があったり、落葉松の林が開墾された畑の近くに残っていたり、スガレ追いや葺取りに行つて広い広い郷原林のドマン中で方角を間違えて迷つてさんさん歩き廻つた頃の桔梗ヶ原。

水道も電燈もなく、三十米もある深井戸からツルべで水を汲み上げて生活し、ランブの下で夜更けまで読書した頃の桔梗ヶ原。

原藤太さんの案内で、かつて田中勘次郎翁が平出のツツミから桔梗ヶ原へ地下道で引水する計画を立て、掘つたという地下道の奥深くまで、ロートンク火をつけて入つて見た頃の桔梗ヶ原。

長い寒い冬がようやく過ぎ、毎年三月十日前後には必ず鳴き初める雲雀の声を夕庭に独り立て聞きながら愛誦詩、土井晩翠の「天地の色は老いずして人間の世の移ろふを歌ふか高く大空に姿は見えぬ夕雲雀」を口吟した頃の桔梗ヶ原。

その頃、大正九年三月、私は桔梗ヶ原に入植して、昭和三十一年二月迄満三十七年間、即ち人生の大半。私は本年七十五才でありましたので丁度人生の半分を桔梗ヶ原で生活いたしました。その間、桔梗ヶ原の皆様に御高情を蒙り、限りもなく御世話様になりました。

桔梗ヶ原が開拓され始めてから本年は百年になるとき、ました。私は入植して丁度五十年になりました。桔梗ヶ原は私の第二の故郷であり、私を育て、くれましたのは桔梗ヶ原の自然と人々であります。それ故思い出はつきず、到底筆紙の及ぶところではありませぬし、今回は紙数に限定がありますので、又の機会にゆずり、かつて桔梗ヶ原の皆様と共に盛んに歌つた拙作「桔梗ヶ原開拓の歌」を記して、もう御忘れになつた方、若い

方では知らない方もあろうから、皆様のいよいよ御健康と御幸福を切に切に祈つて擲筆します。

開拓の歌

(一) 三千年の陋習の

羈われの世を逃れ来て
南信濃の高原や

桔梗ヶ原に鉄とれば
これぞ地上のバラダイス

(二) さあれ共存共栄は

われら処世の旗じるし
一人は多勢のため思い

多勢は一人のためになし
共に築かん理想郷

(三) 見よ東海の秋津島

みずほの国といふながら
耕す者を低く見て

栄華にふける今の世は
真の世相といふべきや

(四) われらはこゝに集り来て

天地自然を友として
ひねもす額汗しつゝ

土と精神を耕して
意義ある人生送らむ



話 題 訪 問

黄綬褒賞を受けた
林 五 一 さん を 尋 ね て

林 五 一 さん (七十九才) は多年果樹栽培の技術向上に努められ、その振興に尽力された功績により五月二十四日黄綬褒賞を賜わってその善行を表彰されました。そこで此度編集部では、その喜びや今迄の御苦勞話をうかがってみました。

記：此の度は大変御目出とうございました。たまたま開拓百年の年の記念すべき年でもあり、桔梗ヶ原としても大変名誉なことだと思えます。
林：ありがとうございます。郷土の皆様や各関係者の方々の御尽力の賜ものと感謝いたしております。先日も老人クラブの方々からも御祝いを頂戴いたしました。何と御礼を申し上げて良いやら……。
記：表彰式では大臣から直接受けられたのですか。
林：農林大臣から直接一人一人が頂きましたが、私が老令者であったためか特にいろいろ尋ねられて、今後も一層御努力下さい

と激励され、老人をいたわる大臣の人間性に胸をうたれました。記：その後で天皇陛下に拝謁されたわけですね。
林：そうです。陛下から直接ねぎらいの御言葉をいただきました。明治生れの私には矢張り一種の感動をおぼえました。

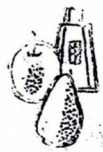
記：林さんは商家の出だときいておられますが、どうして農業をやる気になったのですか。
林：体が弱く諏訪中学を中途退学する様を訳で家業の製糸業も出来ないのも大自然に親しむ農業をやろうと思い、明治四十四年に入植しました。

記：果樹栽培を始められた動機は。
林：小田原に静養中、興津の農林省園芸試験場長であった恩田先生に基礎農学の勉強を進められ冬期間二ヶ年にわたって指導をうけました。そして果樹栽培の将来有望であることを教えられてその気になりました。
記：林さんは長野県で最初に二十世紀を作られたそうですが。

林：チヨット冒険でねえ……。記：「今に駄目になるツラ」って大分笑われましたよ。
記：何年目に実がなりましたか。
林：四年目でしたねえ。早速岡谷のおやじの所へ持っていったらとても喜んでくれました。一番うれしかったです。
記：害虫の駆除には大分苦勞された様ですが。
林：ミバチと言いますがね、花のガクに産卵するので皆滅的な被害になります。大部分の人達はこれで栽培を断念しました。朝五時頃から起きて成虫の活動が不活発な時、枝をたぐいて下にひろげた布に落とすのですが、大変な仕事でした。今考えると夢の様な話ですね。
記：晩霜対策も大変苦勞された様ですが。
林：昭和二年と四年の二回は殆んど全滅状態でした。その時は転業も考えたりしました。夜中、棚にむしろをかけた火をたいたりして色々やってみましたが、結局苦勞した程の効果はありませんでした。
記：試験場や工場の誘致にも大分苦勞された様ですが。

林：私は桔梗ヶ原のぶどうを更に大きく延すにはどうしても有力な工場がなければいけないと思いい、日本一のブドウ酒メーカーである現在のサントリー 鳥井先代社長と会談して塩尻工場を誘致しました。それに技術指導の不充分であることも考え、現在の桔梗ヶ原試験場を誘致いたしました。この時は岡谷の視察から帰る県知事の車を塩尻峠で待ち伏せて陳情したり、同志の方々も皆一生懸命でした。今考えるといろいろ面白い思い出があります。

対談中窓越しに見える二十世紀はその当時栽植されたものだと聞きました。六十年の風雪に耐えた其の梨は、今でも枝もたわゝに実がついて居ります。赤銅色に陽焼けした林さんの顔には生涯を果樹産業に生きぬき、生きぬかんとする決意がにじみ出ていると共に、一種の安らぎさえうかゞわれる様気がいたしました。



レツテルと中味

関 進

この頃ひょっとした事から随分古い話を思い出した。音楽界での話で恐縮だが実は近頃に関係した事からの思い出なのでお許し願いたい。

古い話と言うのは。。。今世紀を代表するバイオリン演奏家を前半、後半と分けるならば、前半をクライスラー、後半をハイフェッツと言つても過言ではないと思

報 分 原 稿

クライスラーと言えば自動車を思ひ出す人も多いと思うが、実は名バイオリニストのフリッツ・クライスラーの事である。この人がハイフェッツの人氣に押され氣味になつて来た頃の話だが、一計を案じたクライスラーは名器ストラディバリウスで演奏すると客集めをした。案の定客は大いに集つた。クライスラーの名演に聞き入つた聴衆を前に今まで演奏していたバイオリンを真二つに折つたクライスラーは、実は今まで演奏した楽器は二束三文のバイオリンです。これから演奏するのが名器、ストラディバリウスですと言つた。ア

ツケにとられた聴衆の心理!!これを想像願いたい。

何事に於いてもそのものゝ真価を知る事は難しいが、クライスラーのユーモラスな聴衆へのいましめ的行為には拍手を送りたい。さて近頃の我々身辺を見わたしてみよう。クライスラーと言ひ車

に關係のある名が出たので車に例を拾うと、新語となつた欠陥車問題である。メーカーの宣伝はスタイルや高速性能が強調され、又安

全性もちゃんと述べられてゐる。運転者は事故を起さぬ様にとやせる思ひでハンドルを握つてゐるのに、その注意力の如何にかゝわらず、車の方にその可能性があつたとは。。。。。

前述の音楽の話とは比較にならぬ腹の立つ話である。

まだまだこの様な事は他にいくらかもある。食糧品・衣類・新建材等。。。時代が進むにつれ分業化する世の中、とてもすべてを知り尽したり研究する事は困難と言ふより不可能ではある。かと言つてレツテル通りの信用は出来ない。種々なグループ等で何か一つでも研究と言ひ程でなくとも関心を持つて話し合う場をつくり、それを

次第に發展させられたらと思ふ。各種のメーカーがどんな宣伝をし

ようとも、我々には撰択の自由がある。しかし乍らこの自由を有効に生かすには、突込んだ研究と言ひが勉強が必要と思はれる。

近年文化国家と言はれる我国ではあるが、底辺にある国民の多くがこれ等の研究的努力を惜しんで、真の文化国家は建設出来ないと思ふ。

余りにも理想論と一笑されそうであるが、敢えて提言したい。

趣味特集

集める楽しさ

井原 勝 巳

今から何年前の事であるか忘れ程昔の事である。春か秋かの大掃除の時、家の押入れのタンスの上を片付けてゐる時に、現皇太子殿下御誕生記念博覧会のスキャンの押されている未使用のハガキ一枚が見つかった。非常に珍しいハガキであると思つた。其の時は珍らしいくらいな氣持で何気なく机の引出しへそれでも大切にに入れておき、半分忘れてしまふ程の時期の立つたある時、家こわし

の手伝いに行きました。家人が内

を片付けて不要品を近くの川原へ運び、捨ててある紙屑の中に明治末期より大正初期にかけての郵便初期のハガキや封筒があり、それには今迄見た事もない画案の切手やハガキのあるのを見、何か変わった物を見付けた様な氣持になつた。

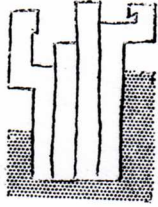
其の時以前に家で見付けたあの未使用のハガキの有つた事を思い出した。「これは珍しい物を見付けた」と思ひ、捨てた家人に了解を得てその中から変つた画案消印の物を何枚か拾ひ出したのです。

昼休にそれを整理してみた所、何と郵便が始つた直後の縦に何本かの線を引いただけの消印や日付と差出局名だけの始めの頃のものはかりであつた。それは後日判明したので、其の時は皆何も忘れて寄り集つて珍らしがり、こんなのが有つたのかと驚きもしてゐた。

私はこれは珍しい又尊い古物と思ひまだ違つたのが有るかもしれないと紙屑の捨てられた川原へ飛んで行き、仕事も忘れてハガキ、封筒を一枚一枚でいねいに調べた所、有る有るわ、前にも劣らぬ枚数を見付けたのでした。何気なく見た川原に捨てたハガキ、封筒の中

<p>に今は見たこともない画案消印のあるハガキ、封筒は本当に珍しい品であると思つた。</p>	<p>それ以来私は家に来る封書の切手を良く見、今迄にないものは取っておき、新聞ラジオ等で新しく発売になると見聞すればその日の来るのを一日千秋の思いで待ちこがれて買う。又松本へ出れば、切手の販売店やデパート等に寄り、切手を見、違つたもの珍らしいものは買ひ求めるようになった。日本切手だけでは物たりず外国切手にも手を出すようになり、国内・国外約三百種類以上も集めた。年賀スポーツ・記念・人物・国定公園・花・鳥。通常切手。等々に區別してブックに整理するその気持はこの趣味を持つ人にだけしかわからない楽しいものであります。切手一枚一枚に、葉書一葉一葉に愛着をもち、切手を一枚ずつセロハンに包み、切手用のピンセットでブックに入れていく時の気持は本当に何とも言えず幸せな気持ちであります。</p>
<p>を開き切手の交換や新発売の予定の発表等あり楽しい一時でした。ある時中部日本新聞塩尻周辺趣味の会特集に写真入りで紹介されたこともあります。そうした何年か後には発売切手も枚数が制限されたり、マニアもふえて、列をして切手を買うようになり一回二回と買付もおろぬく様になり、次第に発行日の買付も遠のく様になって今日に至りました。しかし今でもその当時集めた切手は皆大切に保存してあり時々出してみてはあの熱を入れて集めた当時をしのび、中たるみはしたものの前以上に集めたい気持は今も変わりなく持つております。</p>	<p>話をマツチ集めについて書きました。マツチと一口にいいますがこの位数の多い種類のある物は外に無いと思ひます。何しろ菓子屋あり、酒屋あり、食堂・ドライブイン、バー、喫茶数えあげればきりが無い程の種類であります。デザインも、字あり絵あり、写真ありで、表紙も数えきれません。その中で私の持つているものうち珍らしいものはある映画館ので、次週上映のシーン入りの表紙で横に長く紙軸で百二十本付</p>
<p>のマツチであります。まだまだ他にもこう珍らしいものは沢山あるでしょうが、中でも広重の「東海道五十三次」等は又とないものと思ひます。私はこの「五十三次」は私は自動車で長野県、山梨県を走り廻つていた頃でありますのでどの店と言わずタバコ屋があれば寄つてみましたが五十三次の置いてある店は少なく、なかなか集まりませんでした。</p>	<p>数の限られたタバコ屋でマツチを見せたいと手持のない物を何個でも買求め、五十三次も全部で五十五皆集まるのに何と一年半程かかりました。全部そろえて日本橋から京都まで次々と並べてみますと感無量であります。又元祿年間「主君の仇討」と大石以下四十七人の吉良邸討入りの物語は皆御承知の事と思ひます。その四十七士一人一人をかいたキレイな面などは又見直したくなる程です。これも大石以下四十七人集めるのにタバコ屋をまわり約一ヶ月かかりました。その他日本全都道府県を象徴する木を表わしたのもあります。表には木を、裏には県庁のある市の紋章が入り、木のいわれ等が書かれております。</p>
<p>その他浮世美人、郷土民芸、東京百景、各県の鳥・花など集めれば何種類あるかわかりません。私が関西方面への行き帰りによつて集めた木曾路一軒一軒の食堂、ドライブイン、その他のマツチを塩尻より西へ順に並べてみると、東海道五十三次以上の面白い中仙道の地図ができるのです。それは色とりどりできれいなものであります。さて、切手にしろマツチにしろ種類の数あるものであります。その中から、切手では国定公園、マツチでは五十三次、四十七士の様に数の限られている一種類のものを選んで集めるのにも前記の様な苦労と月日がかかるものです。しかし集まった後のその気持は何とも言えない良い気持なのであります。集めれば苦ありと昔の人は言われましたが、苦労した後には楽しみ、これこそ本当の楽しみであると思ひます。はじまりの楽しみはたいがいの人が味わつたことがあると思ひますが、本当の苦労の後に来る楽しみはそんなに多くの方が味わえるものではないと思ひます。幸いに私はこうした集めることに對し楽しみを味わう事ができました事を心から喜んで</p>	<p>集めることには心から喜んで</p>

<p>いる者であります。 皆さんの中にはバラを集め、盆栽を集め、名を集めておられる方が多くあると思います。その方々は皆自分の思うものが見つかり入手した時の何ともいえない気持をご存じのことと思います。本当にそのものに見入っている姿が浮かんできます。自分がそうであるから。又、中には一生かかっても集めきれない様な品を集めている方もあるでしょう。人それぞれに顔が異なり、気持が異なるのは当然でありましょうが、自分の思っているものを苦勞してやっと手に入れた時のあのうれしい、楽しい気持は、集め歩いた時の苦勞を皆忘れてたゞうれしさと楽しさしかありません。</p> <p>私は何をとはいませんが、何かこれらと思うもの一種類を定めて集める楽しさを味わわれたらと思います。</p> <p>とりとめもなくたゞ書いただけでは、表題の様に集める楽しさを味わってみてはと思ひ筆を取った次第です。</p>	<p style="text-align: center;">碁</p> <p style="text-align: right;">荒井澄夫</p> <p>六月二十一、二の両日、ちの市白樺湖畔で「信毎囲碁、将棋教室」が開催され、記念対局として中央棋壇から、高川(囲碁)大山(将棋)両名人が来信、長野県代表の丸山辰雄五段(囲碁)丸山寛五段(将棋)とそれぞれ、三子局、飛車落ち戦で行なわれることが新聞で報道された。私は勤務の関係でどうしても都合がつかず、勤め人の悲しさをしみじみ感じたものである。大山、高山両名人の格調高い棋風が(いささか生意気であるが：)好きで、新聞、雑誌に掲載されるお二人の譜は必ず念入りに見て時には一人で盤に並べてみたり、通勤の車中で思い浮べて楽しむフアンの一人だからです。それが一堂に会するのであるからこのような機会が再び訪れることあるまいと切齒やく腕したものである。</p>	<p>初段)が、そんな私の姿を見て、「病気に勝つには、あせりを持たぬ事。それには仕事を忘れなさい。気分転換に碁を覚えませんか。」とすすめられた。</p> <p>サナトリウムでは、この渡辺さんの指導で碁が盛んであった。安静時間が過ぎると多勢集まってきて楽しそうに時間を過していた。渡辺さんは教員であり、国鉄職員電力会社の社員等々、勤め人が沢山いた。そして、わだかまりのないほがらかな姿は、私の気持ちに理解できないものすら感じたものである。そんなある日、渡辺さんを見舞いに来た老人が三十分位話をした後二人で碁をはじめた。時々雑談したり、急に考えこんだり、楽しそうに笑ったりして、この部屋には二人以外誰もいない、二人だけの世界だといわんばかりの姿にしばしば私は見とれていた。一時間半位で「今日はこれで。また明後日やりましょう。」と石をかたづけ出した。まだ勝負はついていないようであったが「次の手を考えといて下さい。」と言って帰って行った。しばらくすると渡辺さんは再び碁盤を出し石を並べ出した。一人でおもしろいの</p>	<p>だらうか。私はその思いながら「先程の勝負はいかがでしたか」とたずねると、「今日はずちかけです。明後日が楽しみですよ。いま検討しているところです。」返事もそこそこに渡辺さんは石を並べながら考えていた。私はそれ以上たづねても悪いと思ひ黙ってしまつたが、二日後老人が来て私は驚いた。それは二人がスラスラと石を前回のところまで並べてうちはじめ、勝負がついてから名手、悪手を検討しながら話しているのを横で見ている、私は碁を習うことを決意した。</p> <p>それから約三ヶ月定石を教えられて興味を持ちだしたところ二人は退院することになった。別れる時一ヶ月に一回碁会所で会うことを約した。そして当分渡辺さん以外の人と手合わせを絶対しないで、もっぱら定石を覚えることに専念した。一ヶ月後碁会所で渡辺さんと五目(五子局)で対戦した。これが私の初めての碁である。この勝負は私の四目負けであった。局後最初から並べ出したが六十手目位から忘れて仲々思ひ出せず教わりながら批評を受けた。早く自分の打った碁を並べ直せる様にした</p>
---	--	--	--



いと、そのみ考え、その時紹介された武居先生（五段）に週三回位教えを受け、局後並べ直す訓練を受け続け一年後にはそれができる様になった。その間は私はんこなまでにお二人以外と手合わせをせずに、一子ずつ減らす努力をした。

「まず基礎（定石）を、対局数は少なくても時間をかけて（努力）雑念を避け（慎重）」

繰り返し言われた渡辺さんの言葉が碁だけでなく、仕事の面でも大きな支えとなった。私は今でも気が落ちつけ様とする時は一人で碁盤に向い、石を並べる。そしてあの病院での老人と渡辺さんの心境がようやくわかるような気がしてきた。

趣味の盆栽作り

宮坂 勇

人生何が趣味の一つ位は持ちたいもの。

趣味と言っても数限りなく実にその巾は広い。

然し我々この桔梗原の果樹郷に住む者として園芸の一環としての盆栽作りの趣味等はどんなものでしよう。

朝起きて煙草をくわえ乍ら如露で水をかけてその発育ぶり、枝のび具合を眺める気分こそ実に言いしれぬ味わいのあるものだ。

人間というやつはとかくうそが多いが、自然は総体に向うそを言わない。

自分の思う様にのびてくれるその植物の自然を相手に楽しめる盆栽作りこそみなさんにおすすぬいた私の趣味だ。

桔梗原にも同好の士が数名あるようお見受けするが尚多くの同好者を求めたいものだ。

盆栽も買ってくればいくらでも良い物はある。然し真の趣味はお互の身近にある樹木、又時折の山遊等にちよっと掘ってきた物に手を加えて仕立て上げたその物こそ商

品として価値は少なくとも実に味のあるものだ。

盆栽にも勿論その植え方枝の出し方配置等々一定の法則は色々ある然し趣味として取組むには余りこだわらなくてもよいだろう。

鉢物の趣味にも年令的相違があるらしい。比較的若い者婦人層には花のさくものが喜ばれるらしいが年をとった者には松等の様な真の盆栽が向いているものだろう。

盆栽の歴史は勿論支那から伝わったものの様だ。自分も先年支那各地を転戦した折各所で実に良いものを見受けたし、又つい最近台湾旅行へ行った折も実にすばらしいものを各所で見た。殊に支那鉢の良さは実に思わずよだれを覚えた。最近都市においてはその建築が益益高層化し、土をふまない生活、植物を見ない生活が増加しつつある今日、鉢物植物の売れ行きが益益のびつつあるようだが、自然を羨しむ人間の慾求として当然の事だろう。

一方我が桔梗原においてもご覧の如く新しい建築をそこに見受け、必然的に桔梗原の総耕地は益益減少の一途をたどっている現状だ。

初めての友づり

奈良井川漁業組合桔梗ヶ原 支部長 赤羽 安雄

何かつりの争をというので、私が奈良井川の漁業権を取ったのは確か三十六年だと思った。さて鑑札を取って見たものの、私は天にも地にも「アユ」の友づりなどしたことはない全くの素人で、不安と期待で一杯であった。漁師に友づりの仕かけの要領を聞いてみた。が一向に要領を得ない。通りいっぺんの事しか教えてくれず、少しも核心にふれてこない。現場ではどだい仕かけの要領を聞こうとするのが無理かもしれない。もつとも、友づりの仕かけは、今になつて思えば十人十色であつて、非常に難かしいものであり、又仕かけが上手にできてもアユのいる

耕地問題に於いて年と共に追いつめられつつある我々農民の将来の行き方として盆栽作りを趣味から実益を加えて集团的な研究助長していく途もあながち空想ではないような気がする。

求められるままにあえて愚文を呈した次第。

ポイトにアユを入れるのが又大変である。私は私なりに我流に固執し、つりのエチケツトは「人のじやまをしないことだ」という考えの下に勇んで川に出向いたのです。夏のつりは暑さとの戦いだ。「つれなくてもよい」とにかく朝早くつり場に着き、すがすがしい川気にひたりながら気の向くままに仕度を備えるのがまた大変だ。前夜友達に頼んだ二尾のオトリアユがすぐく元気であるが、なにしろ鼻かんをつけ、仕掛針をつける悪戦苦闘にせつかくのオトリも元気がなくなり、流れの弱い所で少し休ませていよいよ本番だ。アカシアが被さる本流にオトリを入れてほつと一息いれる。それも束の間、照りつける太陽の下でさおの操作をするも、ふと「つれなくてもよい。」とにかくこの気持を味わっただけでよいじゃないかと思ってみる。あの仕掛けでよかったのか悪かったのか。たとえ一尾でもよいから我が手で、神様仏様。その時目のさめるような魚信。「きたな!!」さおを立て下流に操作する時、ついで力が入り魚身が水の上にとび出る。「あつ二尾だ。」あまりの嬉しさに一尾がオトリである

ことを忘れる。片手でさおを操りもう一方の手でアユを手網に入れるのが難かしい。何しろこの僅かな時間だけは暑さも忘れてしまふこれが私が友つりでアユをつつた最初の一尾であった。この瞬間こそつり師だけが知るつりのだいたい味だと思えます。

参考までに本年奈良井川に二十万尾以上のアユを放流してあります現在梅雨で水量も多く解禁時の魚体はやせており、適期は二十日過ぎがよいと思えます。

鑑札料 組合員三、九〇〇円
一年間一、〇〇〇円
小学生五百円、
中・小学生一五〇円です。

私とシヤポテン

工井芳武

自分がシヤポテンの栽培をはじめてからもう何年になるだろう。丁度現在の家を新築した翌年おとなりの矢島さんが温室を増設していたので、特別お願いして同じ土建屋さんに造っていただいた五間程度の温室であるが、かれこれ八年になる。

もともと私の趣味は絵をかくことと風景写真をとることで園芸には殆んど縁がなかった。

ところがたまたま家の事で大変お世話になった青柳紅花園のご主人と知り合い、そのシヤポテンのみごとさに魅せられて、以来シヤポテンにとりつかれて八年、当時親指程のシヤポテンも今ではすっかり大きくなり、自分の子供等同様世話をやかせるもの、あるいはお世辞を言つてとげを引っかけもの、美人も不醜も、老若男女雑居してすでにその種類も六百余におよんでいる。

当初は作りよい三十種程度のシヤポテンをまるで赤ん坊に産湯を使わせるような思いで植えかえなどしたこともあり、今日はどんなに大きくなつたかと、会社の仕事もそこそこにとんで帰り、温室にたずんでいたことも幾度かあった。そんな時よく家内から「そんなシヤポテンが好きならシヤポテンと結婚すればよかった」と小言を言われたが、それもつい昨日の事のような気がする。

夢中でシヤポテンをやっているとよく人から、シヤポテンのどこがそんなに面白いかわれる事がある。よそ目には気遣いかと思われたり、余計な苦勞をしているようにみえるらしい。

結局趣味とはそういうものである。元来シヤポテンという植物は少々とつきにくい植物で、金のかかるものと思ひこまれ、一寸手を出さず気がしないものだ。

しかし何かの機会に一足シヤポテンの世界に入ってみると、シヤポテンにはいかに種類が多くあり、また範囲が広く形態も性質もさまざま非常に変化に富んだ植物であることに驚かされる。

そのためか、同じシヤポテン愛好家と言つてもその楽しみはいろいろと違つていよう、他の園芸部門とはかなり趣を異にしている。まず第一にシヤポテンほど形態の面白い植物は他に類がないであろう。

造花の神が創造した第一級の芸術品がシヤポテンであるともいえず源氏物語のように明快で端正な気品の高いものがあるかと思えば短歌にもた繊細なものもあり、禅門の仁王様のような壮大のものから、謡曲の翁や夕鶴のように雪の綿帽子に包まれたもの、ごつごつとした奇岩怪石から不思議な小動物がより精を連想させるものまでしさいにながめればながめる程、

新しい美しさが発見されるものがある。特に形態と共に色彩の変化がまた豊富である。

緋、赤、紫、桃、橙、黄、褐、黒から純白までさまざまな色彩のつけを備え、その刺座からする何本もの刺は、ある者は剣聖の如く鋭く、あるものは遊女の如き媚をただよわせ、その肌の色は各種様々微妙な色合を呈し、砂漠の寶石のような不思議な模様や彫刻を思わせてくれる。

シャボテンの花の体型程変化したものはない。

しかしガラスをすかして見るような透明な美しさは、美人薄倅のたとえの如く短命ではあるが、やはり砂漠のにおいがしてそれだけにあわれもまたひとしおである。

シャボテンは一般園芸花卉のように冬にはかれて来年の春を待つといったものとは違い、四季に亘って変化に富んだ姿がながめられるのも嬉しいものである。

長い間土婚月来の生活をしてきた私のような管理のゆきとどかない者にも、彼等は態度をかえることなく、吹雪の日など温室の中で一鉢一鉢手に取ってながめられるのもまた格別の楽しみがある。

金鯢をかわいがれば、そばの大虹が私もと曲つた刺をひっかける。そのとなりの金鳥帽子がそれをみて大いにむくれ細い刺を吹き散らし、その刺を一本一本たねんに指からぬきとるのもまた一苦労だ。しかしやはり温室は私のオアシスである。

俳句と私

矢島 二郎

昭和十二、三年頃でしたか、当時青柳隆人さんの世話役で、句会「野ばら会」(現在の野ばら会はこの名を継承)が仲々盛況を極めました。おそらく三、四十人の会員があつたと思えます。当区先輩の方々も相当おられました。この会の投句選句のプリントが毎月配られてきました。これに興味をもつたのが俳句との出会いでした。戦後青年会で文化活動の一端として俳句・短歌の会ができたのでこれに参加して作句を始めました。これが俳句だけ分離して戦後の「野ばら会」ができたわけです。

この会も三、四年位仲々意欲的に続けられました。その後しばらく空白時代がありました。三十七年三月に青柳さんの呼びかけで残党が数名集まりぼつぼつ作句を始めました。三十七年から月例会を始め今年で八年目を迎えます。この会は一人一派で片寄ることのないのが特徴かと思えます。とに角今までの野ばら会の中から一番寿命が長い会になっております。

私の友人に興味と名のつくものを五つ位持っているタフな人がおられます。これ程でなくても、何か好きな事、趣味と言えらるるものを大抵の人がもっていると思えますが私の俳句もまあまあ趣味の部類にはいるかと思えます。日記に必ず一句という人もいますが、私はともそこまではいきません。例会に持っていく難題を作るのが精一杯。作句が作苦になる次第です。

杯内が私の苦吟の態をみて、そんなに苦労して作らなくても...といいますが、仲々やめられません。というのも例会に同好の志が集いしばし浮世の雑念も離れて、俳句だけのふん困気にひたれるからです。年々複雑化する社会生活、仕事に追われる日々、こんな現

代にすべてを忘れて一つ事に熱中する一時もあながちむだではないでしょう。まあこの気分は知る人ぞ知るといふ処でしょう。然し正直な処忙しさに追われると俳句どころではなくなりませんが、それでも例会に出席すると、来てよかったですというのが帰る時の心境です。年間句集を作りはじめてから六冊目になります。古い句集を取り出して見る時、往時がよみがえってくるのです。平凡な人間として馬鞍を重ねる私には、生活記録として唯一のものです。

今の野ばら会がいつまで続くか、何れ消滅の時が来ても生活記録としての俳句との縁はずっと続けたいと思っております。エッ、何ですって? 句を作るより田を作れですか、いやどうもどうも。それではこの辺で...



龍鶴

長瀬修作

小菊の盆栽作りを熊谷先生に教えていたといふ二年目のことでした。六本の苗を先生からいたゞいて植えました。今年こそ独り立ちができると思っていたのに、菊の前に立つと、どうしてよいか手が出ません。時には、菊の顔を見るのが苦痛で、その前を、横眼で見ながら素通りをすることもありました。それでも、時期をはずさず見に来て下さる先生のお力添えでまがりなりにも、小菊たちは、根張りもよくなり、幹も次第に肥り、一々の枝も形造られ、二の枝も伸びてきました。梅雨も明けて、本格的な夏が訪れると、その頃に、小菊は露地から箱に移し植えられました。

箱に植えましたが、葉がしぼんで水をやっても、日蔭においても、生気がもどってきません。十日経っても、りんごの木蔭にしよんぼりとしている菊を、半ばあきらめながら、それでもと、根気よく世話をしているうちに、何時か知らぬ葉がよみがえって来ました。心無いことをしたと悔いていた私は、失われたものかえって来たことを、心から嬉しく思いました。その形成の時期に、深い痛手を受けた二の枝は、横芽を伸ばす力もなく、長く巾のせまい形のまゝでいました。或朝行ってみると、何とこのことでしょうか。あの龍鶴の二の枝に、シヤクトリムシがいて、大事にしていた葉や芽が食いあらされてありました。そのいたいたしい姿が、私の胸にこたえ、憤りでいっぱいになりました。

龍鶴とか白龍というほかの小菊たちは、すくすくと順調に育ち、枝葉も豊かに伸びて、それぞれが個性をもったかたちを作り、先生たちにほめられました。それにひきかえ、龍鶴はすべてが萎縮して、伸び悩んでいます。追肥をやってみたり、二の枝をかばうために、添え枝を伸ばしてみようと、骨を折りました。忙しい時には、部屋へ持ちこんで、夜更けまで、あれこれと考えてみたり、銅線で小枝を矯めたりしました。三、四の枝が作られ、五の枝も頂に拡がり、形はできてきましたが、どことなくさびしく、ひ弱な龍鶴は、誰にも目をかけてもらえず、うとんじられていました。けれども、朝夕、手をかけている私の眼には、根に近く、おのずから作られた曲から、頂まで通った幹の線がすっきりして美しく、うまいわね風雅な趣きがあるように映りました。

秋も深まり、龍鶴にも、小さな蕾が見られるようになり、やがてひとつ、ふたつと、白いかわいらしい花がほころび始めました。鉢へ植えて、根本に苔をはり、うっすらと砂をひいてみると、龍鶴は見ちがえる程ひきたってました。じっと見つめてみると、古人のいう、『わび』『さび』というものの、こころが、そこにたゞよっているように、ふと、私は思いました。

文化の日に、塩尻の菊花展で、挫折を重ねたこの龍鶴が、思いもよらず、金賞をいたゞきました。

これは辛苦に耐えぬいた龍鶴自身らのいのちの力によるものと、過ぎて来た時を省みて、さまざまに思いの去来するのを覚えました。

ダン ス

男性

「趣味」こんな言葉は一般的に広く日常会話の中に用いられているが、よく考えてみるとさまざまの要素を打ち合わせていると思われる。

しかし、ここで私は「趣味」とは人それぞれの好きな道であると解釈したい。

それには有形なもの、無形なもの、そして能動的なもの、受動的なものとの形は色々であるが、これらは案外とその人の人間性に関連してはいるのではないだろうか。判ったような事を書いてはいるが私も、これが趣味だと言え程のものをもち合わせているわけではない。

しかし「好きな事」「好きな道」と中広く解釈するならば、いくつもある。

だが、それらは一時期は確かにそうであったが、時が経つにつれて変化してしまつたものばかり。

まことにたよりない話ではある。
昨今、何かサークルの集まりや青年会の集い、それにクリスマス等、あらゆる機会等に、社交ダンス等、大変さかんである。

私も青年会へ入会当時、その堅苦しい様なおどりにみえて難かしいものだと感心して、見物ばかりしていたものだった。

しかし、もともとそういうものに興味がなかったわけではないから、自然と先輩に教わり、わずかもおどれるようになると、今度は面白くて、自分でも進んで勉強する様になった。

「ブルース」「マンボ」「ルンバ」「ジルバ」「ワルツ」等、まがりなりにもおどれるようになる。クリスマス等の時期になるとあちこちのパーティ会場へと足を運んだ。

しかし、社交ダンスばかりはいくらすきでも一人ではどうすることもできない。パートナーがあつてはじめて一つの形になるのだ。それだけにすばらしいパートナーにめぐりあって一つの曲を軽やかにおどり終った後の気持は、何とも言えず満ちたりた気分だ。

「など強烈なリズムのおどりが流

行し、汗びっしょりになっておどっている姿をよく見る。

これと同じように一昔前「ツイスト」というリズムが大流行したことがあった。テレビでおどっている姿をみて「カッコイイ!!」なんて感心したものだ。高橋の時の修学旅行先の宿で友達と見よう見まねでおどったところ、意外に簡単におどれるのだった。

「ロック」のリズムのつて、三時間近くもおどり狂ったものだが、確かにおどってみるとハートにジーンとしびれるものがあった。それ以来機会ある毎に「ツイスト」に興じ、時には学校までレコードを持参して放課後仲間と共におどり興じたこともあった。

これなど、少し行きすぎかもしれないけれどそれ程までに私達の心をとらえたものだ。

こんな事がきつかけで、これ以後おどる事なら何でもすきになつて今に至っている。

自分が好きを道だからではないが

まだまだ社交ダンスを知らない方も、是非機会をみて一度おどつていたゞきたいと思ひます。音楽にあわせて身体を動かしているだけでいい運動になるし、気持に余裕が生れてくるのではないでしょうか?

それよりも、夫婦で知つていれば、時々のおぬきとして、夫婦和合の一助?(ナマイキカナ:.)として、効果がある事うけあいで

「趣味」と「実益」をかねて一石二鳥でもあり、そんな生活もすばらしいと思ひますがいかがでしょうか。

民謡同好会

桔梗ケ原民謡同好会も発足以来皆様の暖かい御支援のもとに一年半が過ぎました。

現在では毎週金曜日の練習にて北から南までの数多い民謡をやっております。

「静けさや岩にしみいるせみの声」これは前国(現山形市山寺)で芭蕉翁がよんだものですが「静寂」そのものに打たれた翁が後世に残した大きな無形遺産の一つであります。又、名僧慈覚大師が開いた

宝珠山立石寺があり岩石と老樹全山山寺の里は石やの村として栄えたそうです。これは山形県の石切唄の内容です。

この様に民謡は歴史もわかり、その土地土地の心のふるさとが良くわかります。

民謡は健康にも良く、人の和に解つて本心に楽しいものです。これからの行事については、秋の文化祭、地元の敬老会などで成果を発表したいと思ひます。

今後ともよろしく御支援の程お願い致します。 会長

明るい家庭づくり

桔梗ケ原公民館では青少年の健全育成を推進するために、分館内に育成部を設け活動を活発にすすめており、八月には一日〜十五日迄ラジオ体操、五日は小中高校生の

の映画会、九日少年少女野球球大会、十日中学生卓球大会、十三日花火大会の行事を予定し健全育成にとりくんでいます。子供の人は家庭教育、学校教育、社会環境等によって強い影響を受けながら形成されていきますが、子供のしつけの場としての家をどのよう

にしてよい家庭にしていくかは難

かしい問題です。桔梗ヶ原公民館において「家庭の日」を通しての「明るい家庭づくり」運動をすすめています。いまいちど明るい家庭づくりを考えてみましょう。明るい家庭とは、
○家族みんなの座がしっかり守られた家庭です。

それは、父親が一方的に家族を押しつける家庭でもなく、いつて子供を大事にしすぎて、わがままに育てるのでもなく、家族みんながそれぞれ自分の立場をよく守り、「いたわりあい」、「励まし」あって仲良く暮らす家庭です。ケ○わだかまりなく話し合いのできる家庭です。

家族みんなが腹の底から笑い合える家庭です。中高生がいる家庭、祖父母のいる家庭では、特にこれらの人の話をよく聞いてやることをみんなで心がけるべきです。「聞き上手」こそ楽しく話し合える家庭の根本である。
○しつけの場としての家庭です。それはまた、親の愛情満ちた家族の心のふれあいのある家庭です。特に両親を通して生活教育の場です。△親の生活態度が子供の手本にな

ること。
△秘密のない和気あいあいとした明朗な家庭を作ること。
が根本になります。親はもっと強い自信をもって家庭における人間づくりの責任を果たすべきでしょう。○心をそろえ共同作業ができる家庭です。

父親は妻や子のために、妻は夫や子のために、子は両親のために、みんなが家のために働く心をもった家庭です。中学生や高校生になっても、「ぼくがやるよ」「わたしもやるよ」と喜んで仕事に参加できる子供を持った家庭です。

そこから家族としての喜びも責任感も生まれます。家庭の味はこんなところから生まれるでしょう。
八月からの「家庭の日」は次の通りです。
八月十七日・九月二十一日・十月十九日・十一月十六日・十二月二十一日
…毎月第三日曜日の「家庭の日」には「明るい家庭づくり運動」をすすみましょう。
快気祝虚礼廃止の実施

兼題 // 錆

梅雨錆の回転椅子が鳴る生活
蝶生る鉄路は錆びて行止り
赤錆びて鉄塊梅雨の夜に累々
蒼史
仙竹
清流
水声
秋抱

錆やかん置忘れあり畦あざみ
老母死す以後の鍋底梅雨に錆ぶ
鋤錆びし離農の家に草茂る
工期遅る鉄骨錆びて梅雨に立つ
濁流となる荒梅雨の鮎の川
背を灼いておのが影打つ選鉢婦
踏切の中もどしゃぶり遮断機下り
夏期テスト終る子にたぐる飴太く
馬糞の釜の底の冷えきる木曾の夏

雑詠
蒼史
仙竹
清流
水声
秋抱

郭公へ耳そばだてる仔牛かな
雁子
がさごそと袋の中の兜虫 水声
梅雨冷えの一人の昼餉灯をともし
秋抱
(野ばら七月句会より)

編集後記

☆その昔、桔梗ヶ原はキキヨウの花が美しくさきみだれる草原であり、その美しさが都人に桔梗ヶ原と名付けさせたといわれます。この土地に鋳入れされて今年が丁度開拓百年。この桔梗ヶ原は今や果樹園化や住宅地となり、現在百九十五世帯と発展してきました。

☆駒ヶ根市にお住みの北原名田造さんに寄稿していただき、思い出のふるさと桔梗ヶ原を載せることができました。
☆このたびの分館報も共通した趣味を通して、人との心のふれ合いにより明るい部落づくりができるならばと願い「趣味特集」を編集しました。
☆本年度分館報第二号が、皆様方のご協力により発行できました。お忙しいところ原稿をお書きいただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。